

特別研究報告書

スマートコントラクトのガス消費量の Resource Aware MLを用いた静的解析

指導教員：末永 幸平 准教授

京都大学工学部情報学科

小野 雄登

2021年2月2日

スマートコントラクトのガス消費量の Resource Aware ML を用いた静的解析

小野 雄登

内容梗概

2008年にビットコインが開発されて以来、現在に至るまでにブロックチェーンを技術基盤とする様々な仮想通貨が開発されている。スマートコントラクトは、仮想通貨の取引における契約の締結や履行を自動化する仕組みであり、ブロックチェーン上で動作するプログラムとして実装される。

スマートコントラクトには**ガス**の概念が存在する。ガスはコントラクトの実行のために利用する計算資源にかかる手数料を表している。コントラクトが実行される際に、コントラクトの各命令の実行毎に命令の計算コストに応じた量のガスが消費される。消費量の合計が許容ガス消費量を超えると、プログラムの実行が直ちに停止され、プログラムの実行による効果がロールバックされる。コントラクトを実行しようとする際は、あらかじめ一定量のガスに相当する通貨を支払う必要があるが、これは実行が取り消されても返金されない。このような実行コストの無駄を抑えるために、ガスの消費量を静的に解析する手法が求められている。

プログラムの実行コストを解析する手段の一つとして、*Resource Aware ML* (RAML) がある。RAML は、ポテンシャルベースの償却解析と呼ばれる、データ構造の状態に応じてコストが変わる一連の操作のコストを解析する手法をもとに設計された、OCaml で用いられる文法を備えた関数型プログラミング言語である。RAML は入力として与えられたプログラムのリソース消費量の上界を、指定されたメトリックに従って自動的に、かつ静的に解析して、その結果を出力するツールとして用いることができる。

本研究では、RAML を用いて、仮想通貨 Tezos のスマートコントラクトのガス消費量を静的に解析する手法を提案する。Tezos のスマートコントラクトは、スタックベースのプログラミング言語 Michelson で記述される。このプログラムを RAML で解析するために、Michelson において実装されている各命令の挙動を模倣するライブラリを RAML で実装する。このライブラリを用いて、Michelson プログラムの挙動を模倣する RAML プログラムを作成することができる。また、そのプログラムを RAML で解析することで、プログラムのガス消

費量を見積もることができる。

Michelson の命令は受け取ったスタックを書き換える。この挙動を RAML で再現するために、スタックの要素をヴァリアント型 t として定義し、スタックを型 t のリストとして扱い、命令を $(t \text{ list} \rightarrow t \text{ list})$ 型をもつ関数として定義する。Michelson のコントラクトは、初期スタックに積まれる値の型宣言と、初期スタックに対して順に適用される一連の命令によって構成されている。この動作を模倣するプログラムを、本ライブラリを用いて、初期スタックを表すリストに対して命令を順に関数適用するプログラムとして実装することができる。

Tezos のコントラクトの実行に伴うガスの消費量のうち、本研究では特にプログラムの解釈実行を行う際に発生する *interpreter cost* を見積もることを目的とする。各命令のガス消費量は RAML の tick メトリックを用いて表現する。tick メトリックは、リソースの消費量や発生するタイミングをユーザーが定義するためのメトリックで、tick 関数というものを関数の定義中に呼び出すことでその関数のリソース消費量を定義することができる。本ライブラリの各命令について、その命令の *interpreter cost* に相当する値の tick 関数を呼び出すよう定義し、tick メトリックを用いて、コントラクトを模倣するプログラムの解析を行い、コントラクトの *interpreter cost* を見積もる。

いくつかの Michelson コントラクトを模倣する RAML プログラムを作成し、それに対して解析を行いガス消費量の見積もりを行った。その結果、基本的なスタック操作や条件分岐の命令のみで構成されているコントラクトについては解析が成功し、*interpreter cost* を正しく見積もることができた。一方で、リストに対する再帰を行う命令を含むコントラクトでは解析が行えなかった。また、ガス消費量がスタック中の値に依存するような命令を含むコントラクトについては、正しく *interpreter cost* の見積もりを行うことは難しかった。

本研究において実装しなかった命令や、解析が正しく行えなかった命令を扱えるようにライブラリを拡張することは、今後の課題である。また、コントラクトの実行において発生するその他のコストの見積もり、ひいてはコントラクトの実行コスト全体の見積もりについても検討していく。

Static Analysis for Gas Consumption of Smart Contracts Using Resource Aware ML

Yuto Ono

Abstract

Since the development of BitCoin in 2008, a variety of cryptocurrencies based on blockchain technology have been developed. Many cryptocurrencies support *smart contracts*, which are programs executed on a blockchain. A smart contract is used to execute a transaction involving cryptocurrencies automatically.

There is a concept of *gas consumption* in smart contracts. Gas is the fee for the computational resources used to execute a contract. When a contract is executed, the execution of each instruction consumes gas corresponding to its computational cost. If the total consumption exceeds a prespecified amount, the execution of the program is aborted immediately and the effect of the program execution is rolled back. One who would like to execute a contract is required to pay cryptocurrency equivalent to the expected amount of gas in advance, which is not refunded even if the execution is aborted due to an out of gas error. A method to statically analyze the gas consumption is therefore required to avoid such trouble.

Resource Aware ML (RAML) is one of the methods to analyze the execution cost of a program. RAML is a functional programming language equipped with the OCaml syntax. Based on the potential-based amortized analysis, which is an analysis of the costs of a sequence of operations whose costs vary depending on the state of the data structure, RAML automatically and statically analyzes the resource consumption bounds for a given program following a prespecified metric.

This research proposes a method to statically analyze the gas consumption of a smart contract of cryptocurrency Tezos using RAML. A Tezos smart contract is written in a stack-based programming language Michelson. To this end, we implemented a library in RAML each of which imitates the behavior of each Michelson instruction. Using this library, we can write a RAML program that imitates the behavior of a Michelson program. Then,

we can estimate the gas consumption of the program by analyzing it with RAML.

Since a Michelson instruction rewrites the stack, we implemented a RAML function that imitates it as one with $(t\ list \rightarrow t\ list)$, where t is the variant type that expresses stack elements and $t\ list$ is the type that expresses a stack. Then we can implement a RAML program that imitates the behavior of a Michelson program as one that applies the functions in our library to the initial stack.

Where the gas consumption of execution of a Tezos contract consists of several types of costs, we aim at estimating an *interpreter cost* which is for executing a Michelson program. For this purpose, we use the *tick metric* of RAML, which is used for defining the quantity of custom resource consumption. We can define the resource consumption of a function by calling a tick function in the definition of it. We implemented the library so that each function calls a tick function that expresses its interpreter cost to estimate the interpreter cost of a contract by analyzing a RAML program.

We encoded several Michelson contracts to RAML programs using our library and analyzed them with RAML to estimate the gas consumption. The analysis was successful for the contracts that consisted only of instructions of basic stack operations and conditional branch; the estimation was correct for these contracts. However, the analysis was not successful for contracts that contain instructions for recursion on lists. RAML could not analyze the interpreter cost of contracts that contain instructions whose gas consumption depends on the contents of the stack.

Extension of the library to cover more Michelson instructions and handle recursion on lists are left as future work. We also plan to study the other types of costs than the interpreter cost and estimate them.

スマートコントラクトのガス消費量の Resource Aware ML を 用いた静的解析

目次

1	序論	1
2	背景知識	2
2.1	Tezos と Michelson について	2
2.2	コントラクトのガス消費の仕組み	7
2.3	Resource Aware ML について	9
3	RAML での Michelson プログラムの実装	14
3.1	文法	15
3.2	命令	16
3.3	ライブラリを用いたプログラム	17
3.4	tick メトリックによるガス消費量の見積もり	18
4	解析例と考察	21
5	関連研究	24
6	結論	24
6.1	結論	24
6.2	今後の課題	24
	謝辞	25
	参考文献	25

1 序論

2008年にビットコインが開発されて以来[1], 現在に至るまでにブロックチェーンを技術基盤とする様々な仮想通貨が開発され, 分散ネットワーク上での取引が活発化している. 取引の記録をブロックとしてネットワーク上に記憶するという性質上, ブロックチェーンはデータ改竄に対する優れた耐性を持ち, 仮想通貨の取引を支えるコア技術となっている. ブロックチェーン上で用いられる技術としてスマートコントラクトがある. スマートコントラクトは, 仮想通貨の取引における契約の締結や履行を自動化する仕組みであり, ブロックチェーン上で動作するプログラムとして実装される.

スマートコントラクトには**ガス**の概念が存在する[2]. ガスはコントラクトの実行のために利用する計算資源にかかる手数料を表している. コントラクトが実行される際に, コントラクトの各命令の実行毎に命令の計算コストに応じた量のガスが消費される. ガスの消費量の合計が計算されると, それが通貨に変換され, ブロックの生成者であるマイナーに対して払われる手数料となる. コントラクトの実行者は, 実行前にガス消費量の上限となるガス許容量を設定し, 消費量の合計が許容量を超えると, プログラムの実行が直ちに停止され, プログラムの実行による効果がロールバックされる. また, コントラクトを実行しようとする際は, あらかじめ一定量のガスに相当する通貨を支払う必要があるが, これは実行が取り消されても返金されないため, 実行コストが無駄にかかってしまうことになる. このような無駄なコストを削減し, コントラクトの実行コストを抑えるために, コントラクトの実行者は実際のガス消費量に近いガス許容量を設定することが望ましい. そのために, ガスの消費量を静的に解析する手法が求められている.

本研究では, 仮想通貨 Tezos のスマートコントラクトのガス消費量を静的に解析する手法を提案する. Tezos はスマートコントラクトを用いたブロックチェーンを技術基盤とする仮想通貨の1つで, そのスマートコントラクトはスタックベースのプログラミング言語 Michelson で記述される.

解析を行う手法として, 本研究では Resource Aware ML (RAML) [3] を用いる. RAML は, ポテンシャルベースの償却解析と呼ばれる, データ構造の状態に応じてコストが変わる一連の操作のコストを解析する手法をもとに設計された[4], OCamlで用いられる文法を備えた関数型プログラミング言語である.

RAML は入力として与えられたプログラムのリソース消費量の上界を、指定されたメトリックに従って自動的に、かつ静的に解析して、その結果を出力するツールとして用いることができる。

Michelson のプログラムを RAML で解析するために、Michelson の各命令の挙動を模倣するライブラリを RAML で実装する。このライブラリを用いて、Michelson プログラムを模倣する RAML プログラムを作成する。その RAML プログラムを、RAML に備えられているメトリックの一つである tick メトリックを用いて、コントラクトのガス消費量のうち、プログラムの解釈実行を行う際に発生する interpreter cost の見積もりを行う。以上のような手法で、いくつかのコントラクトの解析を行った結果、単純な命令のみで構成されているコントラクトの interpreter cost を正しく見積もることができた一方、interpreter cost の複雑な計算によって算出されるような命令を含むコントラクトについては見積もりが難しく、今後の課題といえる。

本報告書は以下のように構成されている。第2節では、本研究の背景知識として、Tezos と Michelson、スマートコントラクトにおけるガス消費の仕組み、そして解析に用いる RAML についてそれぞれ説明する。第3節では、Michelson プログラムを模倣する RAML プログラムの実装について説明する。第4節では、コントラクトのガス消費量の解析についていくつかの例を挙げ、結果と考察を述べる。第5節では、本研究の関連研究について論ずる。最後に第6節で本研究についての結論を述べる。

2 背景知識

本節では、本研究に関連する背景知識について述べる。第3.1節では Tezos と Michelson について、第3.2節ではスマートコントラクトにおけるガス消費の仕組みについて、第3.3節では RAML についてそれぞれ述べる。

2.1 Tezos と Michelson について

Tezos はスマートコントラクトを用いたブロックチェーンを技術基盤とする仮想通貨の1つである。Bitcoin や Ethereum といった仮想通貨が先立って流通されるようになった中、Tezos はそれらのブロックチェーンの弱点を解消することを目的として開発された。Tezos の特徴として"Proof-of-Stake"(PoS) と呼ばれ

るコンセンサスアルゴリズムを採用していることが挙げられる。従来のブロックチェーンで採用されている"Proof-of-Work"(PoW)が、コンピュータの計算能力が高いユーザーに対してブロック生成の権利を与えているのに対して、PoSでは通貨の保有量が多いユーザーに対してブロック生成の権利が与えられる。Tezosの採用しているPoSは"Liquid-Proof-of-Stake"(LPoS)といい、ブロック生成の権利を他のユーザーに委任することができる。これにより、多くのユーザーがブロック生成に参加することができ、プロトコルの分散性を高めるという目的に寄与している。

Mihcelsonは、Tezosのスマートコントラクトを記述するために用いられるプログラミング言語である。この言語はスタックベースで、高レベルのデータ型とプリミティブ、および厳密な静的型チェックを備えている [5]。

Michelsonの文法のうち、本研究でRAMLで実装する部分の文法を図??に示す。Tはスタックの要素の型を表す。Tは整数値の型int、自然整数の型nat、Tezosにおける通貨量の型mutez、Booleanの型bool、アドレスを表す型address、Unit値の型unit、オプション値の型option、命令を表す型operation、コントラクトを表す型contract、ペアの型pair、ユニオンの型orがある。Vはスタックの要素になり得る値を表し、整数値の i 、BooleanのTrue、False、アドレスの a 、Unit値のUnit、ペアの (V_1, V_2) 、ユニオンのLeft V, Right V, オプション値のSome V, None, 空リストの $[]$ 、リストの結合を表す $V_1 :: V_2$ 、命令列ISがある。 n は自然整数、 i は整数である。ISは命令列で、命令Iのシーケンスである。命令Iは、プログラムを中止する命令(FAILWITH)、構造のコントロールに関する命令(IF, LOOP, DIP)、スタックの操作に関する命令(DROP, DUP, SWAP, PUSH, UNIT)、スタックのトップ要素の比較に関する命令(EQ, NEQ, LT, GT, LE, GE)、Booleanに関する操作の命令(OR, AND, XOR, NOT)、整数値に関する命令(NEG, ABS, ISNAT, INT, ADD, SUB, MUL, EDIV)、スタックの上から2つの要素の比較命令(COMPARE)、ペアに関する命令(PAIR, CAR, CDR)、オプション値に関する命令(SOME, NONE, IF_NONE)、ユニオンに関する命令(LEFT, RIGHT, IF_LEFT)、リストに関する命令(CONS, NIL, IF_CONS, MAP, SIZE, ITER)、コントラクトに関する命令(CONTRACT, TRANSFER_TOKENS, AMOUNT, SOURCE)がある。Sはスタックを表す。空のスタックをEで表し、スタックに積まれた要素は:で区切る。

$$\begin{aligned}
T &::= \text{int} \mid \text{nat} \mid \text{mtez} \mid \text{bool} \mid \text{address} \mid \text{unit} \mid \\
&\quad \text{option } T \mid \text{list } T \mid \text{operation} \mid \text{contract } T \mid \text{pair } T \ T \mid \text{or } T \ T \\
V &::= i \mid \text{True} \mid \text{False} \mid a \mid \text{Unit} \mid (V_1, V_2) \mid \text{Left } V \mid \text{Right } V \mid \\
&\quad \text{Some } V \mid \text{None} \mid [] \mid V_1 :: V_2 \mid IS \\
n &::= [0 - 9] + \\
i &::= n \mid -n \\
IS &::= \{I_1; \dots; I_n\} \\
I &::= \text{FAILWITH} \mid \text{IF } IS_1 \ IS_2 \mid \text{LOOP } IS \mid \text{DIP } IS \mid \\
&\quad \text{DROP} \mid \text{DUP} \mid \text{SWAP} \mid \text{PUSH } T \ V \mid \text{UNIT} \mid \\
&\quad \text{EQ} \mid \text{NEQ} \mid \text{LT} \mid \text{GT} \mid \text{LE} \mid \text{GE} \mid \text{OR} \mid \text{AND} \mid \text{XOR} \mid \text{NOT} \mid \\
&\quad \text{NEG} \mid \text{ABS} \mid \text{ISNAT} \mid \text{INT} \mid \text{ADD} \mid \text{SUB} \mid \text{MUL} \mid \text{EDIV} \mid \\
&\quad \text{COMPARE} \mid \text{PAIR} \mid \text{CAR} \mid \text{CDR} \mid \text{SOME} \mid \text{NONE } T \mid \\
&\quad \text{IF_NONE } IS_1 \ IS_2 \mid \text{LEFT } T \mid \text{RIGHT } T \mid \text{IF_LEFT } IS_1 \ IS_2 \mid \\
&\quad \text{NIL } T \mid \text{CONS} \mid \text{IF_CONS } IS_1 \ IS_2 \mid \text{SIZE} \mid \text{MAP } IS \mid \text{ITER } IS \mid \\
&\quad \text{CONTRACT } T \mid \text{TRANSFER_TOKENS} \mid \text{AMOUNT} \mid \text{SOURCE} \\
S &::= E \mid V : S
\end{aligned}$$

Michelson のプログラムは、プログラムに対して与えられるパラメータと、ブロックチェーン上に保存されているストレージのペアを受け取り、このプログラムの終了後に実行される操作のリストと、プログラムの実行中に更新されブロックチェーン上に保存されるストレージのペアを返す純粋な関数である。プログラムの本体は、順番に実行される一連の命令である。各命令は、スタックを入力として受け取り、そのスタックの内容を書き換えて出力する関数である。プログラムの初期スタックは、引数として与えられたパラメータとストレージのペアが一番上に積まれた状態のもので、その初期スタックに対して順番に命令が適用され、最後に操作のリストとストレージのペアが一番上に積まれた状態のスタックが残り、それが出力される。

Michelson プログラムの例として、簡単な演算を行うプログラムである `example1` のコードを Code 1 に示す。これは、整数のペアをパラメータとして受

け取り、2つの整数の和をストレージに書き込むプログラムである。なお、各命令後のスタックの状態を/**/で囲われたコメントで示している。

```
1 parameter (pair int int);
2 storage int;
3 code /* ((para1, para2), st) */
4 { CAR ; /* (para1, para2) */
5   DUP ; /* (para1, para2) : (para1, para2) */
6   CAR ; /* para1 : (para1, para2) */
7   DIP { CDR } ; /* para1 : para2 */
8   ADD ; /* st' */
9   NIL operation ; /* [] : st' */
10  PAIR } /* ([], st') */
```

Code 1: example1.tz

以下、プログラムの内容を説明する。

Michelson プログラムのコードは、プログラムに対して与えられる引数である `parameter` と、ブロックチェーン上に保存されているストレージの値である `storage` の型宣言から始まる。1行目は `parameter` の型が `(pair int int)` であること、2行目は `storage` の型が `int` であることを宣言している。3行目以降はプログラムの本体である `code` である。code には一連の命令が記述されていて、この命令が初期スタックに対して順に実行されていく。以下、code の内容について行番号ごとに説明する。

- プログラム開始時のスタックは、`parameter` と `storage` の値のペアが空のスタックに積まれた状態で始まる。`parameter` の値を `(para1, para2)`、`storage` の値を `st` と表すとすると、初期スタックは `((para1, para2), st)` である。
- 4行目の `CAR` は、スタックのトップの要素がペアだった場合、その要素を取り出して、ペアの第1要素をスタックに積む命令である。4行目時点でのスタックは `(para1, para2)` である。
- 5行目の `DUP` は、スタックのトップの要素を複製してスタックに積む命令である。5行目時点でのスタックは `(para1, para2) : (para1, para2)` である。
- 6行目は4行目と同じく `CAR` を実行する。6行目時点でのスタックは `para1 : (para1, para2)` である。
- 7行目の `DIP` は引数として命令列 `body` を受け取る命令で、スタックのトップの要素を保持した状態で、その要素を取り出した状態のスタックに対し

て `body` を実行する命令である。つまり、スタックのトップの `para1` を保持した状態で、スタック $(para1, para2)$ に対して `CDR` を実行する。`CDR` は、スタックのトップの要素がペアの場合、その要素を取り出して、ペアの第2要素をスタックに積む命令である。よって、7行目時点でのスタックは `para1 : para2` である。

- 8行目の `ADD` は、スタックのトップの要素 x と2番目の要素 y の型が、それら2つの演算が定義されているような型である場合、 x と y を取り出し、 $x+y$ の値をスタックに積む命令である。例えば、 x と y がともに `int` 型ならば、 $x+y$ は `int` 型である。`para1 + para2` の値を st' と表すとすると、8行目時点でのスタックは st' である。
- 9行目の `NIL` は引数として型 a を受け取る命令で、リストの型が a であるような空のリスト `[]` をスタックに積む命令である。9行目時点でのスタックは $[] : st'$ である。
- 10行目の `PAIR` はスタックのトップの要素と2番目の要素を取り出し、それらのペアをスタックに積む命令である。この命令後、スタックは $([], st')$ となり、プログラムが終了する。

プログラムの終了時のスタックは、このプログラム終了後に続いて行われる操作のリスト `operation list` と、実行中に更新されブロックチェーンに保存されるストレージの値 `storage'` のペアのみが積まれている状態でなければならない。このとき、プログラム実行前のストレージの値 `storage` と、プログラム実行後のストレージの値 `storage'` の型が一致している必要がある。

Michelson には静的型チェックが備えられている。それぞれの命令には、命令の実行前と実行後のスタックの状態を型で表した型規則が存在する。例えば、`PAIR` についての型規則は以下のように表される。

$$a' : b' : S' \rightarrow \text{pair } a' b' : S'$$

これは、実行前のスタックのトップの要素の型が a' 、2番目の要素の型が b' のとき、実行後のスタックのトップの要素が `pair $a' b'$` となることを示している。また、`ADD` についての型規則は以下のように表される。

$$\text{int} : \text{int} : S' \rightarrow \text{int} : S'$$

これは、実行前のスタックのトップの要素と2番目の要素がともに `int` である必

要があり、その場合、実行後のスタックのトップの要素が `int` となることを示している。

命令を実行する前にスタックの状態が型規則に則った形でない場合、命令は失敗する。これを防ぐために、プログラム実行前に静的な型チェックが行われる。

2.2 コントラクトのガス消費の仕組み

スマートコントラクトにおけるガスは、コントラクトを実行させる上で必要となる手数料を表している。スマートコントラクトを実行する際、ブロックの生成者であるマイナーがそのコントラクトの検証を行い、その対価としてコントラクトの実行者がマイナーに対して手数料を支払う必要がある。この手数料を計算する際にガスという概念が用いられており、計算されたガスの消費量はそのブロックチェーンで用いられる通貨に変換される。

ガス消費量の計算については、コントラクトが実行される際に、コントラクトの各命令の実行毎に命令の計算コストに応じた量のガスが消費される。ガスの消費量の合計が計算されると、それが通貨に変換され、マイナーに対して支払う手数料となる。また、これとは別にあらかじめ一定量のガスに相当する通貨をマイナーに対して支払う必要がある。コントラクトの実行者は実行時にガスの上限値を設定し、ガスの消費量の合計がその上限値を超えると、プログラムの実行が直ちに停止され、プログラムの実行による変更が取り消される。このとき、実行が取り消された場合でも、あらかじめ支払った通貨は返金されないで、無駄なコストとなってしまう。

以降は、Tezos におけるガス消費量の計算について述べる。Tezos において、トップレベルのコードやラムダ、型などの値は全てバイトシーケンスとして保存され、送信される。コントラクトの実行において発生するガスの消費量は、以下の8つのコストに分けられていて、それぞれ計算方法や発生するタイミングが異なる。

1. データベースにアクセスして、必要とする値が存在するかどうか確認し、その値を読み込む。このとき、`reading cost` が発生する。
2. バイトシーケンスは、型なしの中間表現である Micheline 表現へと逆シリアル化される。このとき、`deserialization cost` が発生する。Micheline 表現では、全ての値が以下の要素で表される。
 - `integer`

- string
 - バイトシーケンス
 - 命令や型などのプリミティブ
 - 値のシーケンス
3. Micheline 表現は、プロトコル固有の型付き表現に解析される。このとき、parsing cost が発生する。
 4. 型付き表現への解析において、ある型と別の型の等価性をチェックすることがある。このとき、type compaison cost が発生する。
 5. 型付き表現はインタプリタに渡され、コントラクトの内容が解釈実行される。このとき、interpreter cost が発生する。
 6. コントラクトの実行後、型付き表現は Micheline 表現に変換される。このとき、unparsing cost が発生する。
 7. Micheline 表現はバイトシーケンスへとシリアル化され、保存される。このとき、Ssrialization cost が発生する。
 8. コントラクトの実行によって変更されたデータをデータベースに書き込む。このとき、writing cost が発生する。

それぞれのコストは、以下に示すフィールドをもつレコードとして内部的に表現される。

```
{ allocations , steps , reads , writes , bytes_read , bytes_written }
```

各レコードには以下のように重みが設定されていて、コストに重みをかけることで、各コストをガスとして得ることができる。

```
allocation_weight = 2
step_weight = 1
read_base_weight = 100
write_base_weight = 160
byte_read_weight = 10
byte_written_weight = 15
```

例として、reading cost は通常、以下ようになる。

```
{ reads: scale 2
  , bytes_read: scale $ <length of the value in bytes>
}
```

scale は値を実際に出力する値にスケーリングする関数のようなものである。こ

のコストに重みをかけた結果として、ガス消費量が $\text{scale } \$ 200 + 10 * \text{bytes_read}$ と得られる。

2.3 Resource Aware ML について

Resource Aware ML(RAML) は、一階の関数プログラムの多項式リソース消費量の境界を、静的かつ自動的に計算する関数型プログラミング言語である。プログラムの文法は OCaml のものを採用しており、入力として OCaml の文法で書かれたプログラムを与えると、その多項式リソース境界を出力するツールとして扱うことができる。

リソース消費量の分析は、ポテンシャルベースの償却解析によって行われる。計算量の1つとして、同じ処理を連続で行ったときの1回あたりの計算量を償却計算量といい、償却計算量を求めることを償却解析といい、データ構造の状態に応じてコストが変わる一連の操作のコストを解析する手法として用いられる。償却解析における手法の一つとして、データ構造に対してポテンシャル Φ と呼ばれる非負の数値を導入する方法がある。ポテンシャルはそのデータ構造に対して貯まってい、処理に対して支払われる貯金として扱われる。ポテンシャルを導入することで、以下のように償却計算量を求めることができる。

$$\begin{aligned}\text{償却計算量} &= \text{実計算量} + \Delta\Phi \\ &= \text{実計算量} + \Phi(\text{実行後}) - \Phi(\text{実行前})\end{aligned}$$

以上のようにして行われる償却解析を、ポテンシャルベースの償却解析と呼ぶ。

図1にRAMLの文法を示す。 e はRAMLプログラム上の式を表していて、Unit値(), Boolean値True, False, 整数値 n , 変数 x , 変数 x_1 と x_2 の演算, 関数適用, let式を用いた局所関数を伴う式, ifによる条件分岐式, 変数 x_1 と x_2 のペア, ペアに対するmatch式, 空リストnil, リストの結合を表す $\text{cons}(x_h, x_t)$, リストに対するmatch式がある。演算子 binop には、整数値に対する演算である $+$, $-$, $*$, mod , div , Boolean値に対する演算である and , or がある。 A と F は、RAMLプログラム上でのsimple typeを表している。 A はデータ型で、Unit型のunit, Boolean型のbool, 整数型のint, simple typeの値のリスト, simple typeの値のペアがある。 F は関数型で、simple typeの値を受け取ってsimple typeの値を返す関数型を表している。また、RAML上のwell-typedな式を、このsimple typeが割り当てられた式と定義している。

$$\begin{aligned}
e &::= () \mid \text{True} \mid \text{False} \mid n \mid x \mid \\
&\quad x_1 \text{ binop } x_2 \mid f(x_1, \dots, x_n) \mid \\
&\quad \text{let } x = e_1 \text{ in } e_2 \mid \text{if } x \text{ then } e_t \text{ else } e_f \mid \\
&\quad (x_1, x_2) \mid \text{match } x \text{ with } (x_1, x_2) \rightarrow e \mid \\
&\quad \text{nil} \mid \text{cons}(x_h, x_t) \mid \\
&\quad \text{match } x \text{ with } \mid \text{nil} \rightarrow e_1 \mid \text{cons}(x_h, x_t) \rightarrow e_2 \mid \\
\text{binop} &::= + \mid - \mid * \mid \text{mod} \mid \text{div} \mid \text{and} \mid \text{or} \\
A &::= \text{unit} \mid \text{bool} \mid \text{int} \mid L(A) \mid (A, A) \\
F &::= (A, \dots, A) \rightarrow A
\end{aligned}$$

図 1: RAML の文法

RAML プログラムは、関数宣言のリストと main 式からなる。関数宣言は、関数の型宣言または関数の定義である。それぞれの関数定義に対して型宣言を行うことができるが、プログラム内で型宣言が行われていない関数については、プログラム実行時に型推論が行われる。main 式はリソース消費量の分析の対象となる式で、プログラムの最後に記述する。

RAML のリソース消費量の分析は、入力されたプログラムの、big-step operational semantics による各評価ステップに対して一定のコストを割り当てるメトリックによって、リソース消費量の計算を行う。メトリックは以下の 4 つが存在する。

- heap メトリックは、実行時に割り当てられたヒープセルの数を計算する。
- steps メトリックは、実行時の評価ステップ数を計算する。
- tick メトリックは、ユーザーが定義した tick 関数による tick 値を計算する。ユーザーは関数の定義中に `Raml.tick(1.0)` のような関数 (tick 関数) を呼び出すことができる。tick 関数は呼び出される度に、引数の float 値に等しいリソース消費 (tick 値) が発生する。
- flips メトリックは、フリップ関数によるフリップ数を計算する。本論文では扱わないため、詳細な説明は省略する。

ユーザーは分析を行う際にメトリックを指定することで、自分の注目するリソースの消費量を分析の出力として得ることができる。

RAML プログラムの例として、リストに対するクイックソートを行うプログラムである quicksort のコードを Code 2 に示す。

```
1 let rec append l1 l2 =
2   match l1 with
3   | [] -> l2
4   | x::xs -> x::(append xs l2)
5
6 let rec partition f l =
7   match l with
8   | [] -> ([],[])
9   | x::xs ->
10    let (cs,bs) = partition f xs in
11    Raml.tick(1.0);
12    if f x then (cs,x::bs) else (x::cs,bs)
13
14 let rec quicksort gt = function
15   | [] -> []
16   | x::xs ->
17    let ys, zs = partition (gt x) xs in
18    append (quicksort gt ys) (x :: (quicksort gt zs))
19
20 let _ = quicksort (fun a b -> a <= b) [9;8;7;6;5;4;3;2;1]
```

Code 2: quicksort.raml

見てわかる通り、プログラムのコードの見た目は OCaml に近いが、20 行目の `let _ = ...` の部分は OCaml には見られない表現である。この式が main 式で、リソース消費量の分析の対象となる。このプログラムは、`append`、`partition`、`quicksort` の 3 つの関数を定義し、main 式は `quicksort` の関数適用が記述されている。

1-4 行目の `append` 関数は、2 つのリスト `l1,l2` を引数として受け取り、それらを結合したリストを返す関数である。6-12 行目の `partition` 関数は、リスト `l` と、`l` の要素の型の値を受け取って `bool` 型の値を返す関数 `f` を引数として受け取り、`l` の要素を `f` に関数適用したときの返回值によって 2 つのリストに分割する関数である。11 行目に `tick` 関数である `Raml.tick(1.0)` があり、結果として `l` の要素の数だけ 1.0 の `tick` 値が発生する。14-18 行目の `quicksort` 関数は、リスト `l` と、`l` の要素の型の値を 2 つ受け取って `bool` 型の値を返す関数 `gt` を引数として受け

取り、1に対してクイックソートを実行する関数である。quicksort の定義中に append と partition が用いられている。

RAML のプログラムの実行において、主に evaluation と analysis の 2 つの操作がある。

evaluation は、プログラムの評価を行い、main 式の評価結果の返り値を出力する。また、先述した 4 つのメトリックによるリソース消費量を計算し出力する。evaluation は、./main eval [prog.raml] というコマンドによって実行される。ここで prog.raml は入力として用いるプログラムファイルである。

quicksort.raml を入力として evaluation を実行した結果を以下に示す。

```
1 $ ./main eval examples/quicksort.raml
2
3 Resource Aware ML, Version 1.5.0, June 2020
4
5 Typechecking expression ...
6   Typecheck successful.
7   Stack-based typecheck successful.
8
9 Evaluating expression ...
10
11   Return value:
12     [ 1; 2; 3; 4; 5; 6; 7; 8; 9 ]
13
14   Evaluation steps: 1624.00
15   Ticks:           36.00
16   Heap space:      547.00
17   Flips:            0.00
```

11-12 行目に、main 式の評価の返り値として、リスト [9;8;7;6;5;4;3;2;1] が正しくソートされた値が出力されている。また、14-17 行目に、上から steps, ticks, heap, flips と、それぞれのメトリックによって計算されたリソース消費量の値が出力されている。

analysis は、指定されたメトリックに則ってプログラムのリソース消費量の範囲の解析を実行する。解析の結果として、リソース消費量の範囲が、入力されたプログラムに依存する変数の多項式として出力される。出力される範囲は、リソース消費量の上限、下限、または上限と下限が一致した定数リソース境界から選ぶことができる。analysis は、./main analyze [mode] <metric> [<d1>] [<d2>] [-print (all | none | consume | level <lev>)] [-m] [prog.raml] [func_name] というコマンドで実行される。ここで、<>は指定必須のオプションで、[] は任意のオプションである。mode は出力される境界のタイプを upper, lower, constant から選ぶ。指定しない場合は upper となる。metric は分析に用いるメトリック

を heap, steps, ticks, flips から選ぶ. d1 および d2 は, リソース消費量の境界の次数を指定する. 分析は次数が d1,d1+1,...,d2 の範囲で行われ, 出力される多項式もその範囲の次数となる. d1 を指定しない場合, d1=d2 として扱われる. -print はプログラムにおいて実行された関数の型を出力する. -print にもいくつかのオプションがあり, -print all は実行されたすべての関数の型を出力する. -print none は型の出力をしない. -print consume は消費関数(?)の型を出力する. -print level <lev> は式を構文木として見た際に深さが<lev>以下の関数の型を出力する. -m は, 指定するとモジュールモードとなり, main 式の代わりにトップレベルで定義された関数の型をすべて出力する. prog.raml は入力として用いるプログラムファイルである. func_name はモジュールモードでのみ指定することができるオプションで, 指定した関数についてのみ型を出力する.

quicksort.raml を入力として, mode=upper, metric=steps, d1=1, d2=4, -print level 1 とオプションを設定して analysis を実行した結果を以下に示す.

```

1  $ ./main analyze steps 1 4 -print level 1 examples/quicksort.raml
2
3  Resource Aware ML, Version 1.5.0, June 2020
4
5  Typechecking expression ...
6    Typecheck successful.
7    Stack-based typecheck successful.
8
9  Analyzing expression ...
10
11    Trying degree: 1, 2
12
13    Function types:
14
15    == quicksort :
16
17    [int -> int -> bool; int list] -> int list
18
19    Non-zero annotations of the argument:
20      35 <--  (*, [::(*); ::(*)])
21      36 <--  (*, [::(*)])
22      3  <--  (*, [])
23
24    Non-zero annotations of result:
25
26    Simplified bound:
27      3 + 18.5*M + 17.5*M^2
28    where
29      M is the number of ::-nodes of the 2nd component of the argument
30
31    ====
32

```

```
33   Derived upper bound: 1624.00
34
35   Mode:           upper
36   Metric:         steps
37   Degree:         2
38   Run time:       0.14 seconds
39   #Constraints:   638
```

11 行目に Trying degree: 1,2 とあるが、指定された次数の 1,2,3,4 の低い値から順に分析を行い、次数が 2 のときに分析が成功したことを示している。指定された次数において分析が成功しない場合、その旨がエラーメッセージで表示される。15-29 行目には、main 式で用いられた関数 quicksort の分析の結果が示されている。17 行目に quicksort の型が示されている。[] 中の型が引数の型で、複数ある場合は ; で区切られている。19-22 行目に、引数のポテンシャル注釈が引数のデータ構造ごとに示されている。このポテンシャル注釈に関する情報を多項式に変換したものが、26-29 行目に示されている。そして、33 行目に main 式の上界の値が出力され、35-39 行目に分析のオプションや計算時間、計算量が出力されている。

なお、先述したように RAML の文法は OCaml のものを採用しているが、RAML においてサポートされていない OCaml の機能がある。以下にその例を示す。

- オブジェクト指向言語としての特徴
- モジュール
- 複雑な帰納的データ型
- 文字列や文字

3 RAML での Michelson プログラムの実装

本節では、RAML を用いて、Michelson プログラムの挙動を模倣するプログラムを実装する手法について述べる。具体的には、Michelson において実装されている文法や命令を模倣するライブラリを RAML において設計する、また、設計したライブラリについて、各命令において発生するガス消費量を表す tick 関数を定義する。このライブラリを用いて、Michelson プログラムの挙動を模倣する RAML プログラムを実装する。第 3.1 節では文法について、第 3.2 節では命令について、第 3.3 節ではライブラリを用いたプログラムについて、第 3.4 節ではガス消費量に関する tick 関数の定義について述べる。なお、実装したラ

イブライリは本研究の GitHub レポジトリ ¹⁾ の `library/michleson.raml` にあるもので、適宜参照されたい。

3.1 文法

Michelson の文法は、すでに第 2.1 節で示した。Michelson の文法をライブラリで設計するにあたって、スタックの要素を OCaml のヴァリエント型を用いて表す。Code3 に実装したヴァリエント型 `t` を示す。

```
1 type t =  
2   Int of int | Nat of Rnat.t | Mutez of Rnat.t |  
3   Bool of bool | Address | Unit | MNone | MSome of t |  
4   LNil | LCons of t * t | Operation | Contract |  
5   Pair of t * t | Left of t | Right of t
```

Code 3: スタックの要素を表すヴァリエント型

ヴァリエント型 `t` のコンストラクタとして、`int` 型の `Int`、`nat` 型の `Nat`、`mutez` 型の `Mutez`、`bool` 型の `Bool`、`address` 型の `Address`、`unit` 型の `Unit`、`option` 型の `MNone`、`MSone`、`list` 型の `LNil`、`LCons`、`operation` 型の `Operation`、`contract` 型の `Contract`、`pair` 型の `Pair`、`or` 型の `Left`、`Right` がある。`Nat` の引数の型である `Rnat.t` は、RAML に用意されている自然整数を表す型で、四則演算と、`n` が 0 か 1 以上かで分岐する条件分岐関数が用意されている。`Operation`、`Address`、`Contract` については、簡略化のために引数をとらない単一のコンストラクタとして扱う。また、`list` 型の要素を設計するにあたって、先述したように RAML において複雑な帰納的データ型の実装には制限があり、ヴァリエント型 `t` のコンストラクタとして、`t list` 型の値を引数にとるコンストラクタを宣言することができない。その代替として、空リストを表す `LNil` と、リストの要素と元のリストを引数としてリストの結合を表す `LCons` をコンストラクタとして宣言する。なお、このヴァリエント型の設計上、`LCons` の 2 つ目の引数は型 `t` の値であればよい、とされているが、コントラクトを模倣するプログラムの実行において、`LCons` の 2 つ目の引数が `LNil` または `LCons` となるように命令の関数が定義されている。

このヴァリエント型 `t` を用いて、スタックを型 `t` のリストとして設計すること

¹⁾ <https://github.com/yutono326/raml>

ができる。

3.2 命令

Michelson の命令は、スタックを受け取り、そのスタックの内容を書き換える操作として実装されている。この挙動を模倣する関数を、第 3.1 節で設計した文法において、スタックに相当するリストを受け取って、書き換え後のスタックを返すような $(t \text{ list} \rightarrow t \text{ list})$ 型をもつ関数として定義する。

以下、実装した関数のうち、特筆すべきものについて説明する。

- FAILWITH は例外 `Invalid_argument` を発生させる関数として定義する。
- `p` は 1.0 の tick 値を発生させる関数で、Michelson プログラムでの `{, }` をこれに置換する。後述する tick メトリックによるによるガス消費量の見積もりにおいて用いる。
- 中置演算子 `|>` は、引数として受け取った 2 つの関数 `f, g` を、引数のスタックに対して続けて適用する演算子である。Michelson における命令のシーケンスに相当する役割をもつ。
- LOOP は Michelson の挙動を再現すると解析が難しくなるため、挙動を簡単なものになっている。具体的には、引数として `Rnat.t` 型の引数 `n` を受け取って、スタックのトップの要素に関わらず、引数の命令シーケンスを `n` 回残りのスタックに適用する関数として定義する。20 行目の `Rnat.ifz` は、1 つ目の引数の `Rnat.t` 型の値 `n` が 0 ならば 2 つ目の引数の関数を、`n` が 1 以上ならば `n'=n-1` として 3 つ目の引数の関数を適用する条件分岐関数である。
- DIP は、スタックのトップを保持して、残りのスタックに対して引数の命令のシーケンスを適用する関数として定義する。
- PUSH は、受け取った要素をスタックに積む命令として定義するが、積む要素の型の指定はなく、値のみを引数として受け取る。
- ADD, SUB, MUL, EDIV は、それぞれスタックのトップと 2 番目の要素を取り出し、整数値の演算結果をスタックに積む関数として定義する。命令にもよるが、スタックのトップと 2 番目の要素の型として、`Int` 同士、`Nat` 同士、`Int` と `Nat`、`Mutez` 同士、`Mutez` と `Nat` といったパターンがあり、パターンに応じて演算結果の要素の型が決まるので、パターンマッチングによって分ける。また、EDIV ではスタックの 2 番目の要素が 0 かそうでないかで条件分岐を行い、スタックに積む要素の型は値のペアのオプション型

となる.

- COMPARE はスタックのトップと 2 番目の要素の比較を行い, トップの要素の方が大きい場合は Int 1 を, 2 番目の要素の方が大きい場合は Int -1 を, 等しい場合は Int 0 をスタックに積む関数として定義する. Int, Nat, Mutez について比較を行うことができるが, 違う型同士の比較はできない.
- NONE, LEFT, RIGHT, NIL について, Michelson の定義ではそれぞれオプション値, ユニオン, リストの中身の型を引数で指定する必要があるが, 本ライブラリの関数の定義では型指定はしない.
- MAP, SIZE, ITER はリストに対する再帰を行う命令で, 本ライブラリにおいてはスタックの要素が命令に合致している場合に, それぞれ対応した補助関数を呼び出す関数として定義し, その補助関数においてリストの再帰を行う.
- TRANSFER_TOKENS, CONTRACT, SOURCE, AMOUNT といったコントラクトに関する命令は, 本ライブラリではコントラクトに紐づけられたアドレスや通貨量などの情報を管理することができないので, それらの情報を簡略化したスタック操作のみを行う関数として定義する.

3.3 ライブラリを用いたプログラム

Michelson のプログラムでは, プログラムに与えられる parameter と, ブロックチェーン上に保存されている storage の型宣言から始まり, parameter と storage のペアが積まれた初期スタックに対して, 一連の命令が順番に実行される. このプログラムの挙動を模倣する RAML のプログラムを, 設計したライブラリを用いて, 初期スタックのリストに対して関数を順に適用するプログラムとして実装する.

Code1 に示したプログラム example1.raml の挙動を模倣する RAML プログラム example1.raml を Code4 に示す.

```
1 let _ =  
2   (pair  
3     (nil  
4       (add  
5         (dip1 (p |> cdr |> p)  
6           (car  
7             (dup
```

```

8   (car
9   (Pair (Pair (Int 3, Int 5), Int 0) :: [])))))))))

```

Code 4: example1.raml

プログラムの設計上, Michelson プログラムと記述の順番が逆になっていて読みにくいことをご了承されたい. Michelson プログラムでは `parameter` と `storage` の型宣言から始まるが, RAML プログラムでは初期スタックの値を宣言し, それに対して命令に相当する関数を順に適用する. 5 行目の `dip1` の引数となる命令シーケンスは, 命令と命令の間を `|>` で繋ぐことによって表す. また, シーケンスの最初と最後は `{, }` に相当する `p` を記述する.

このプログラムの `evaluation` を実行した結果を以下に示す.

```

1  $ ./main eval michelson/example1.raml
2
3  Resource Aware ML, Version 1.5.0, June 2020
4
5  Typechecking expression ...
6    Typecheck successful.
7    Stack-based typecheck successful.
8
9  Evaluating expression ...
10
11   Return value:
12     [ Pair ( (), LNil (), Int 8 )
13
14                                     ]
15
16   Evaluation steps: 270.00
17   Ticks:             35.00
18   Heap space:        166.00
19   Flips:              0.00

```

11-13 行目に, 操作のリストと, `parameter` として受け取った整数値の和のペアが入ったスタックが返り値として示されている.

3.4 tick メトリックによるガス消費量の見積もり

スマートコントラクトのガス消費量を見積もりを行うにあたって, コントラクトを実際に実行してそのガス消費量を調べる必要がある. コントラクトの実行環境として, Tezos ハンズオン¹⁾のサンドボックス環境を用いる. この環境を利用する利点として, 単体のコンピュータで完結していて外部のネットワークを必要としない点, 環境をいつでもリセットできる点が挙げられる.

¹⁾ <https://gitlab.com/dailambda/docker-tezos-hands-on>

第2.2節でも述べたように、コントラクトの実行において発生するガスの消費量は8つのコストに分けられていて、それぞれ計算方法が異なる。ゆえに、コントラクトの実行コスト全体を見積もることは難しいと判断し、8つのコストのうちの一つである interpreter cost の見積もりを行うことにした。interpreter cost を選んだ理由として、コストとしての大きさが他のコストより小さいこと、命令毎にコストが設定されているので、後述する方法による見積もりがしやすいことが挙げられる。

コントラクトの interpreter cost を調べるにあたって、run script <src> on storage <storage> and input <input> -trace-stack [-gas <gas>] というコマンドを実行し、ガス消費の推移を調べるという方法を用いる。これは、プログラムファイル<src>のスクリプトを、parameter を<input>、storage を<storage>とした上で実行するコマンドで、-trace-stack というオプションをつけることで1ステップ毎のスタックの状態、ガスの残量（使用許容量-消費量）が出力される。-gas <gas>はスクリプト開始時のガスの使用許容量を指定できるオプションである。

Code1 に示したプログラム example1.tz について run script を実行した結果を以下に示す。

```
1 $ ./tezos-client run script contracts/pairadd.tz on storage 0 and input 'Pair 3 5'
   --trace-stack --gas 100000
2 storage
3   8
4 emitted operations
5
6 trace
7   - location: 8 (remaining gas: 99655 units remaining)
8     [ (Pair (Pair 3 5) 0) ]
9   - location: 9 (remaining gas: 99652 units remaining)
10    [ (Pair 3 5) @parameter ]
11   - location: 10 (remaining gas: 99649 units remaining)
12    [ (Pair 3 5) @parameter
13      (Pair 3 5) @parameter ]
14   - location: 11 (remaining gas: 99646 units remaining)
15    [ 3
16      (Pair 3 5) @parameter ]
17   - location: 14 (remaining gas: 99640 units remaining)
18    [ 5 ]
19   - location: 13 (remaining gas: 99639 units remaining)
20    [ 5 ]
21   - location: 12 (remaining gas: 99639 units remaining)
22    [ 3
23      5 ]
24   - location: 15 (remaining gas: 99626 units remaining)
25    [ 8 ]
26   - location: 16 (remaining gas: 99620 units remaining)
```

```

27 [ {}
28   8   ]
29 - location: 18 (remaining gas: 99612 units remaining)
30 [ (Pair {} 8)   ]
31 - location: -1 (remaining gas: 99611 units remaining)
32 [ (Pair {} 8)   ]

```

6行目の trace 以降の出力で、1ステップ毎のスタックの状況、ガス残量が示されている。開始時のガス許容量を 100000units と指定しているが、最初の出力でいくらか減っていることから、reading cost, deserialization cost, parsing cost, type comparison cost が消費された時点のガス残量が示されていると考えられる。このガス残量から、最後の出力時点でのガス残量を引いた値が interpreter cost であると考えられる。trace 以降を見てみると、location はプログラムの実行の進行度合いを示す値で、例えば 7-10 行目を見てみると、location が 8 から 9 になり、最初の命令である CAR が実行されてスタックが書き換えられ、ガスが 3units 消費されていることがわかる。ここから CAR 命令の interpreter cost が 3units であると推測できる。また、17-23 行目では DIP {CDR} が実行されているが、命令のシーケンスなどにおいて{, }を読み込むとガスが 1units 消費されていることがわかる。これが interpreter cost に含まれるかどうかは定かではないが、この消費量も含めて見積もることとする。以上の例に倣って、様々な Michelson プログラムについて run script コマンドを実行し、各命令の interpreter cost を調べた。

見積もりの方法として、tick メトリックを用いた解析を用いる。第 3.2 節で実装した各命令について、その命令の interpreter cost に相当する値の tick 関数を呼び出すよう定義し、ライブラリを用いて実装したプログラムを tick メトリックを用いて解析し、解析の結果として出力される tick 値の上界を interpreter cost の見積もり結果と見なす。

以下、tick 関数によって正確に interpreter cost を見積もることのできない命令について述べる。

- ADD, SUB, MUL, EDIV の整数値の演算の命令における interpreter cost は、スタックの要素の整数値の絶対値に依存していて、¹⁾、それを tick 関数で表すことはできなかった。ライブラリの命令においては、スタックの要素にに関わらず一定の tick 値を発生するように定義されている。

¹⁾ 2つの整数値の絶対値のうち大きい方を n とすると、 $\log_2 n$ に比例する。

- CONTRACT 命令の interpreter cost は、例外的に 10000units 以上となっており、さらに対象となるアドレスによって増減するため、設計したライブラリにおいて見積もるには情報が不十分であった。ライブラリの命令においては、12000.0 の tick 値を発生するように定義されている。

4 解析例と考察

以下の 5 つの Michelson プログラムについて、挙動を模倣する RAML プログラムを、第 3 節で設計したライブラリを用いて実装し (それぞれ example1.raml, example2.raml, example3.raml, example4.raml, example5.raml とする), tick メトリックによる解析を行い, interpreter cost の見積もりを行った。

example1.tz Code1 で示したプログラム。

example2.tz parameter として受け取った整数値を 0 になるまで 1 ずつ減算して、ストレージに書き込む。コードを Code5 に示す。

example3.tz parameter として受け取った整数値が 0 より大きいなら 1, 0 以下なら -1 をストレージに書き込む。コードを Code6 に示す。

example4.tz parameter として受け取った整数値のリストの、要素の和をストレージに書き込む。コードを Code7 に示す。

example5.tz source と呼ばれる取引が始まった実行の起点のアカウントへ受け取った通貨を送金し返す。コードを Code8 に示す。

```

1 parameter int;
2 storage int;
3 code { CAR ;
4       DUP ;
5       GT ;
6       LOOP { PUSH int -1 ; ADD ; DUP ; GT } ;
7       NIL operation ;
8       PAIR }
```

Code 5: example2.tz

```

1 parameter int;
2 storage int;
3 code { CAR ;
4       GT ;
5       IF {PUSH int 1} {PUSH int -1} ;
```

```

6      NIL operation ;
7      PAIR  }

```

Code 6: example3.tz

```

1  parameter (list int);
2  storage int;
3  code { CAR ;
4        DIP { PUSH int 0 } ;
5        ITER { ADD } ;
6        NIL operation ;
7        PAIR  }

```

Code 7: example4.tz

```

1  parameter unit;
2  storage unit;
3  code { CDR ;
4        NIL operation ;
5        AMOUNT ;
6        PUSH mutez 0 ;
7        COMPARE ;
8        EQ ;
9        IF
10         {}
11         { SOURCE ; CONTRACT unit ; { IF_NONE FAILWITH {} }
           ; AMOUNT ; UNIT ; TRANSFER_TOKENS ; CONS } ;
12        PAIR  }

```

Code 8: example5.tz

解析の結果を、表 1 に示す。interpreter cost は run script コマンドにおいて示された interpreter cost で、derived upper bound は RAML プログラムの解析の結果として得られた上界である。

example1.raml と example2.raml の解析結果については、interpreter cost と derived upper bound に多少の開きがあるが、これは、ADD 命令の interpreter cost がスタックの要素の整数値の絶対値によって変動する点が RAML の解析において考慮されてないことに起因していて、それを除けば正しく見積もることができたとと言える。example4.raml については解析自体が正しく行われなかつ

表 1: interpreter cost の解析結果

プログラム	interpreter cost	derived upper bound
example1.tz	43	37.00
example2.tz	282	225.00
example3.tz	28	28.00
example4.tz	80	failed
example5.tz	12079	12079.00

た. これは, リストに対する再帰を行う命令である ITER 命令がプログラムに含まれていたことが原因であると考えられる. example5.raml は CONTRACT 命令を含んだプログラムで, 正確な解析はできないと先述したが, このプログラムにおける CONTRACT 命令の interpreter cost が 12000units であったため, 解析結果として正しい上界が得られた.

example4.raml の解析に関して, 以下に示すような iter_list の関数適用のみを行うプログラムについての解析は行うことができる.

```
1 let _ =
2   iter_list (p |> add |> p) (LCons (Int 1, LCons (Int 2,
   LCons (Int 3, LCons (Int 4, LNil)))) :: Int 0 :: [])
```

このプログラムの解析結果として得られる上界が 32.00 であることから, 以下のように example4.raml の iter_list の部分を置き換えることで, プログラムの解析を行うことができる.

```
1 let f s = Raml.tick(32.0); Int 10 :: []
2
3 let _ =
4   (pair
5     (nil
6       (f
7         (dip1 (p |> push (Int 0) |> p)
8           (car
9             (Pair (LCons (Int 1, LCons (Int 2, LCons (Int 3, LCons (Int
              4, LNil))))), Int 0) :: []))))))
```

しかし, example4.raml のような iter_list を含む関数を連続適用するプログ

ラムについて解析が正しく行われなかった点については、詳細な原因はわからなかった。

5 関連研究

(あとで書く.)

6 結論

6.1 結論

本研究では、RAML を用いて、Tezos のスマートコントラクトのガス消費量を静的に解析する手法を提案した。Tezos のスマートコントラクトはスタックベースのプログラミング言語である Michelson で記述されていて、その挙動を RAML で再現するために、スタックの要素を独自のヴァリアント型の値として定義し、Michelson の各命令を、スタックを表すリストを受け取ってその内容を変更して返す関数として定義し、Michelson プログラムを初期スタックを表すリストに対して命令を順に関数適用する RAML プログラムとして実装した。ガス消費量の見積もりについては、コントラクトの実行に伴うガス消費量のうち interpreter cost を見積もることを目的とし、RAML の tick メトリックを用いてプログラムの解析を行う手法を示した。

いくつかのコントラクトについて解析を行い、interpreter cost を見積もった結果、基本的なスタック操作や条件分岐の命令のみで構成されているコントラクトについては解析が成功し、interpreter cost を正しく見積もることができた。一方で、リストや集合に対する再帰を行う命令を含むコントラクトでは解析が行えなかった。また、ガス消費量がスタック中の値に依存するような命令を含むコントラクトについては、正しく interpreter cost の見積もりを行うことは難しかった。

6.2 今後の課題

本研究では、Michelson に実装されている命令のうち主要な命令について RAML ライブラリで扱えるように実装した。一方、set や map、関数などの型が実装されておらず、それらに関連する命令も実装されていない。本ライブラリにおいてより多くのプログラムを扱えるように、実装を進めていく予定で

ある．また，リストの再帰を行う命令を含むコントラクトの解析が正しく行えなかった点について，リスト型の実装方法に問題があった可能性がある．これを正しく解析できるようにするために，実装体系を見直すことも検討している．

また，コントラクトの実行に伴うガス消費量のうち，`interpreter cost`を見積もる手法を示したが，`interpreter cost`はコントラクトの実行コスト全体のごく一部に過ぎない．コントラクトの実行コスト全体の見積もりを行うために，その他のコストの計算方法について研究し，解析を行うことも今後の課題である．

謝辞

本報告書の執筆にあたり，多くの方々に支援いただきました．

本研究に取り組むにあたって，研究テーマを提示していただき，終始適切な助言を賜り，丁寧に指導して下さった末永幸平准教授に心より感謝いたします．また，Tezos や Michelson の体系や様々な知識について解説して頂いた古瀬淳氏と，基本的な Michelson コードを提供して頂いた斉藤大聖氏に感謝いたします．そして，本報告書の執筆にあたって，添削や助言を頂いた五十嵐淳教授，和賀正樹助教をはじめ，多くの助言を頂いた五十嵐・末永研究室の皆様深く感謝いたします．

参考文献

- [1] Nakamoto, S.: Bitcoin: A peer-to-peer electronic cash system, <https://bitcoin.org/bitcoin.pdf> (2008).
- [2] Allombert, V., Bourgoin, M. and Tesson, J.: Introduction to the tezos blockchain, *2019 International Conference on High Performance Computing & Simulation (HPCS)*, IEEE, pp. 1–10 (2019).
- [3] Hoffmann, J., Aehlig, K. and Hofmann, M.: Resource aware ML, *International Conference on Computer Aided Verification*, Springer, pp. 781–786 (2012).
- [4] Hoffmann, J. and Hofmann, M.: Amortized resource analysis with polynomial potential, *European Symposium on Programming*, Springer, pp. 287–306 (2010).
- [5] : Michelson: the language of Smart Contracts in Tezos, <https://tezos.>

`gitlab.io/008/michelson.html`. (Accessed on 01/29/2021).